

## 結髪土偶は自立していたのか 一動作連鎖研究から見た縄文土偶一

會田 容弘

郡山女子大学短期大学部 地域創成学科 教授

### はじめに

山形大学附属博物館所蔵の結髪土偶が松葉杖をつきながらも立ち上がった。その姿は恩師加藤稔(注1)の夢だった(加藤1994)。亡くなった恩師の夢実現の片棒を担ぐとは思ってもよらなかった。そして、その種を蒔いたのも加藤稔であった。1978年私が山形大学人文学部学生で考古学を志していた頃、加藤稔は私に附属博物館に展示している石田遺跡出土土偶の実測図作成を命じた。私は素直にその言いつけ通り、実測図を作成した。だけにとどまらず、同様の結髪土偶の集成作業も行い、論文にしてしまった。これは加藤が私に「石田の土偶は縄文時代最後の土偶だ。東北地方以外にはあまりない。」というヒントをくれたから書けたのだ。果たして、私の処女論文は「土偶」になり、『山形考古』に掲載された(会田1979)。集成作業は資料見学や文献調査による。その時、親戚の仲介で寒河江市の安達家に資料見学に伺った。そこに刺突文の付いた「土偶の足」があった。ピカッとひらめいた。「山大土偶の胴体に接合するかも」。しかしそれを検証することはできずに40年余の時間が過ぎた。2018年6月寒河江市教育委員会大宮富善氏を仕事のついでに尋ねたとき、収蔵庫で期せずして安達家の「土偶の足」に再会してしまった。「山大土偶に接合するかも」の一言が、それほど威力があるとは思えなかった。しかし、1か月後、大宮先輩から電話で「接合するようだから確認に来い」という強い圧。あたふた山形大学附属博物館に出かけてゆくと、これまた高校の先輩新宮学館長までご臨席。佐藤琴先生、押野学芸員の熱いまなざしのもと、あとには引けない。実際、胴体と足を同時に見るのはこれが初めて。別物だったらとんだ赤っ恥。が、幸い割れ口が意外と新しい。復元に用いた石膏が邪魔して、ぴったりとは接合しないがほぼ接合。「やっぱりくっつきますねえ。」得意満面の笑顔だったか、引きつり笑顔だったか(大宮2019)。その後、とんとん拍子に事は進み、お金がないはずの山大博物館が雲の中から大金をかき集め、結髪土偶を立たせる大手術を執行したということである。こんな大それた計画を完遂したヒトはただものじゃない。

### 考古学の道は険し

私は考古学と博物館学を女子短大生に講じて<sup>ろく</sup>禄を<sup>は</sup>食んでいる教員である。女子短大生を多数引き連れ、会津若松市笹山原遺跡を考古学実習で19年間も掘り続けてきた。笹山原遺跡は旧石器時代、縄文時代、平安時代の三つの時代が重なる重層遺跡である。「さあみんな、3万年のタイムトラベルに行こう」と学生を誘い、発掘している。旧石器時代資料を

得たかったが、上に重なるものから順番に掘らねばならない。平安時代の生活面、縄文時代前期の生活面、そしてやっと地表下1mの旧石器時代生活面に至る。

山大時代の考古学の師匠は加藤稔、指導教官は古事記研究の大家川副武胤教授(注2)であった。川副先生は漢字の読めない学生でも暖かく育ててくださった。山大から東北大考古学研究室に行った。芹澤長介教授(注3)にあこがれていた。大学院は英語ができなくて、2回落ちて3回目で入学を許可された。芹澤教授からは「英語の勉強を中学からやり直したまえ!!」と叱責され、奮起した。三度目の正直というやつである。入学したが芹澤教授は定年退官された。東北大学大学院では自由な雰囲気の中、研究室の仲間たちと考古学を学んだ。山大時代に山中一郎(注4)というヒトと知り合っていた。当時奈良大学講師。フランス帰りの新進気鋭の旧石器研究者。妙に馬が合って、可愛がってもらった。当時の山中一郎はバリバリの石器型式学者で属性分析、統計処理など最先端の研究を行っていた。東北大学考古学研究室には阿子島香(注5)という助手がいた。アメリカ留学帰りで「新しい考古学」を標榜する一派に属していた。こちらとも仲がよかった。結構誰とでも仲良くなれたのは、東北大学の純粹培養ではなく、山形大学卒という外様だったからかもしれない。

私が学んだ考古学とは基本的に型式学という方法、遺物を見る目を養うことであった。1点の考古資料を型式にあてはめ、どの時代、どの地域のものか判定できることが学識であった。この型式は考古学者が設定した概念(規範)なのであるが、考古学者間で共通認識となっているのか疑問に思えてくる。誰もが認識できるのであれば、統計的に算出できるのではないかと考える一方で、考古資料の母集団は未知数で、全体が土の中に埋まっていて、たまたま掘り出した資料を相手にしているのではないだろうか。10個の資料で議論していたのに、資料が突然100個になると、分類基準も変わらざるをえなくなるだろう。実体としての型式を認識できるのだろうか。遺物属性を計測し、集計し、手計算からパソコンに移行し、多変量解析までやった。しかし、答えは見えない。次第に叢雲のように、何かが誤っているのではないかという疑問が沸いてきた。

こんな疑念を払拭してくれたのは、山中一郎がフランスから呼んできた石器作りの名人、J.ペルグラン(注6)だった。彼は、旧石器人と同じように石器を作ることができた。2006年京都大学総合博物館(山中一郎館長)主催の「ペルグラン石器教室」に参加することで私は日本考古学の呪縛から解放された。ペルグランは言った。「私たちの最高のお手本は石器時代人だ。」と。石器は石器を作った人から学び、彼らのように石器を作ることができなくて資料認識はできない。

## 動作連鎖という考え方

ペルグランの方法は二人の偉大な研究者の研究を受け継いでいた。A.ルロワ＝グーラン(注7)とJ.チキシエ(注8)である。ルロワ＝グーランは「動作連鎖」、チキシエは「石器技

術学」を提唱した。ルロワ＝グーランの研究は「動作連鎖」に留まるものではなく、自らが開拓した「古民族誌」研究法を後期旧石器時代パンスヴァン遺跡発掘で実践したことに意義がある。ルロワ＝グーランの遺跡研究は「彼らはどこから来て、ここで何をして、そしてどこに去っていったか。」という問題を解決することであった。遺跡遺物を通して過去を研究する時、それらを残した人間の動作を直接観察することはできない。しかし、人間は様々な動作連鎖の痕跡を残している。その痕跡から動作連鎖を復元することが問題を解決する手掛かりとなる。彼らの残した痕跡を正確に掘り出し、記録し、そして痕跡と痕跡を繋げてゆくことが重要な研究であると提示した。ペルグランは石器技術学をJ.チキシユから学び、石器をどのような計画で作り(メソッド)、どのような加撃具でどのように保持して割るか(テクニック)という研究法を提示した。そして、その遺跡で行われた石器製作の動作連鎖を卓越した石器製作技術による実験によって再現することで、見えない技術を検証した。

ペルグランに出会ってから考古資料への取り組み方が変わった。個々の資料から個別的な過程を復元することが重要であると考えられるようになった。それは歴史学としての考古学から遠く離れてゆくことでもあった。

郡山女子大学短期大学部では、学生を引き連れ笹山原遺跡の調査を継続している。旧石器研究を目的としたが、平安時代、縄文時代の生活面調査を結果的に行うことになった。だが、これが幸いした。平安時代の笹山原遺跡は土師器生産集落であることがわかった。縄文時代前期の笹山原ムラは小規模な周年居住集落であることがわかった。土器も焼いていた。旧石器時代の資料は石器だけだったが、平安時代、縄文時代は様々な土器などが資料として加わった。それらを製作する動作連鎖を考えないわけにはいなくなった。生産遺跡なので未成品や失敗品が多数出土する。それらを観察することで、それ以前の作業内容を知ることができる。私の考古学は変わった。

## 動作連鎖から土偶を見直す

かつて私の書いた論文(會田1979)は結髪土偶という型式の分布を示し、そこに縄文時代最後の縄文的世界があったのではないかという仮説を提示したものだ。その仮説は証明できない。土偶祭祀仮説は学界の定説になっている。かわいらしい女性のヒトガタは女神であったり、地母神であったり、その解釈は多様である。土偶研究の最大の問題点は研究の初期から解釈が加わっていたことである。土偶の完形品が極めて少ないという事実もミステリアスな解釈を増幅させた。その最たるものは水野正好(1974)の土偶祭祀仮説である。女性の一生を土偶は表しているという。祭祀の最後の姿が再生象徴としての土偶破碎。なんともロマンチックだ。この解釈仮説も証明できるのだろうか。

動作連鎖研究から見た土偶は、粘土の塊を部品に分けて作り、接合し、形を作り、紋様を施文し、乾燥し、焼成し完成する。完成した土偶は何等かの祭祀行為に使われるのかも

しれない。このような作り方をする土偶の接合部が脆いのは周知の事実。そこに力を加えれば、頭が、手が、足が、ポロリと落ちる。しかしそれだけではない。粘土の塊で作られる土偶の焼成が難しい。薄い器壁の土器ですら、時々焼成に失敗する(柿沼・會田2013)。1センチを越える厚さの中実土偶の焼成は難しい。焼成失敗の最大原因は破裂である。粘土内部の水分が急激な加熱により気化し、その逃げ道を失い、破裂する。土器の焼成実験ではよく経験することである。壊れた土偶が救出される。壊したのではない。壊れたのだ。このような焼成事故は大きな土偶ほど起こりやすい。

日本最大の土偶、山形県舟形町西ノ前遺跡出土土偶は破損して出土した。臀部を欠いてバラバラに割れた姿で出土した。失われた部分を補修して完形品とした。しかし、西ノ前土偶は焼成後、自立していたのだろうか。失われた臀部はどこにあるのだろうか。焼成中の破裂は焼きが不十分な場合がある。焼きが不十分な粘土は土中で風化する。土にもどる。

西ノ前土偶が自立していたのか検証が必要である。観察の手がかりは足の裏である。使用された土器は底部が摩耗している。土偶も自立していれば、足裏は摩耗しているはずである。日本一大きな土偶であれば、焼成は最も難しかったはずである。

さて、石田遺跡土偶に話を戻そう。石田遺跡出土結髪土偶は大正末に工事中に発見された時に右脇腹から左足にかけて、鋭い工具により切りつけられた。幸い胴体と左足は回収されたが、右脇腹と右足は回収されなかった。はたして右足があったのか。これは検証不能である。背中を見てみよう。右の背中の円形刺突文が剥落している。この部分は焼成不足のようで、風化が著しい。結髪土偶も失敗品だったのだろうか。しかし、結髪土偶は焼成後、もうひと手間、動作連鎖が加わっている。全身に赤色顔料が塗布されているのだ。この作業は焼成後でなければできない。動作連鎖の視点とは人間が物作りをする場合、不可逆的な動作の繋がりから判断することなのである。結髪土偶が全身に赤色顔料を塗られていた事実は、全身が焼きあがった後に、行われた作業であるとわかるのだ。では、結髪土偶はどのように使われたのであろうか。再発見された左足の裏はつつるに摩耗していた。かつて、結髪土偶は二本の足で自立していた証拠である。これが動作連鎖の視点で見た石田遺跡の結髪土偶である。

このような結論は歴史叙述でもなんでもない。ひとつのエピソードであるが、確実なエピソード、史的事実である。過去は推測もできる、想像もできる、妄想もできる。しかし、事実はひとつである。どのような研究方法が確実なものか、考古学は現代社会に何を提供できるか。わたしの到達した答えは、安心して信頼できる考古学的事実を提供することである。誰にも負けない、クソ実証である。

## おわりに

中学2年生の時、大江町小清の高座遺跡で黄褐色土の中から石器を引き抜いた(會田1971)。旧石器かもしれない。心は踊った。何とかこれを証明したい。加藤稔先生のお宅に持参した。「古い石器かもしれない。」現地を見なければ。加藤稔、米地文夫(注9)、山形理(注10)山形第四紀研究会の主要メンバーがわざわざ現地まで足を運んでくれた。その時、米地先生が「會田君、この地層は旧石器時代の古い地層かどうか今の段階ではわからない。君が大学に入るところには、もっと研究が進んでいるから、それまでは学校の勉強をちゃんとするんだよ。」とやさしく諭してくれた。これは「これ以上考古学にはまるな。」という警鐘であった。が、その警鐘は応援歌に聞こえた。

「少年老い易く、学なり難し」「白頭搔けばさらに短し」なれど “Still digging!!”

### 注

注1) 加藤稔(1931-2013) 考古学者。東北芸術工科大学名誉教授。山形大学非常勤講師を長く務めた。代表作『日本文化の源流』『東北日本の旧石器文化』など多数。

注2) 川副武胤(1922-1993) 古代史家。山形大学人文学部教授を経て、就実女子大学教授。

『古事記の研究』『古事記及び日本書紀の研究』『日本古代王朝の思想と文化』など。

注3) 芹澤長介(1919～2009) 考古学者。旧石器研究。東北大学名誉教授。『石器時代の日本』『旧石器の知識』『旧石器時代』など

注4) 山中一郎(1945～2013) 先史学者。旧石器研究。京都大学名誉教授。『フランスで知り合った人びと』『石器研究のダイナミズム』翻訳M.ブレジヨン『先史学辞典』、アルレット、ルロワ＝グーラン& A.ルロワ＝グーラン『アイヌの旅』

注5) 阿子島香(1955～) 東北大学大学院文学研究科教授。『石器の使用痕』

注6) J.ペルグラン(1955～) 旧石器研究者。フランスCNRS 研究部長。

注7) A.ルロワ＝グーラン(1911-1986) 古民族誌学者。ソルボンヌ大学教授。

アンドレ ルロワ＝グーラン、『身ぶりと言葉』(ちくま学芸文庫)

クロード・アンリ ロケ、アンドレ ルロワ＝グーラン『世界の根源』(ちくま学芸文庫)

注8) J.チキシエ(1925-2018) 旧石器研究者。ナンテール大学教授。『石器研究入門』クバプロ

注9) 米地文夫(1934-) 地理学者。山形大学教育学部助教授、東北大学理学部助教授、岩手県立大学教授。

注10) 山形理(1925～2016) 地質学者。山形大学教養部教授。

### 引用文献

會田容弘1971「高座遺跡調査日誌」さあべい同人会『さあべい』第3号

會田容弘1979「東北地方における縄文時代終末期以降の土偶の変遷と分布」『山形考古』第3巻第2号PP.27-43

大宮富善2019「追記」寒河江市史編纂委員会『寒河江市史別編考古編』P.15

柿沼梨沙・會田容弘2017「縄文土器の動作連鎖―笹山原遺跡No.16の資料分析を通して―」『福島考古』第59号PP.1-14

加藤稔1994「我が附属博物館の黎明」『山形大学附属博物館 40年のことども』PP.19-23

水野正好1974「土偶祭式の復元」『信濃』第26巻第4号PP.298-312